

# 動物とともに生活すること

～ 今年の記録より ～

兵頭 直美

〈動物の家で〉

動物の家の低い入口の戸を前かがみにくぐると、

「先生、遅かったで。もう終わっちゃったよ。」

ヒトミとアユミからしょうがないと言わんばかりの声がかかる。柄付きたわしを手に、うざぎやにわとり、あ

ひるのがーこ、それぞれの部屋をきれいにし終えた彼女

たちは、所用で遅れた私を胸を張って迎え入れた。

「ごめんごめん。思ったより時間がかかってしまつて。

もうほとんど終わったんやなあ。」

私は、きれいに水洗いされた動物の家をもう一度しみじ

みと見回した。

チエコは、園一番の暴れん坊であるにわたりのこっこをどうやって部屋に入れるか考えた末、ホースとほうきを手には、こっことの間距離をおいてつつかれないうちを追いついていく。

「しっしっ。はよう行き。」

せわしげなチエコの姿に

「ちょっとかわいそうなんやけどなあ。」

側で様子を見ていたマユコが仕方がないといった表情でつぶやいた。これまで何人もの友達がつつかれて痛い目

にあっているだけに、そのかわりたるや慎重そのものだ。他のにわとりは平気でだっこし、いいこいいこできるチエコもっこはさすがに苦手らしく、ホースとほうきばかりが前に出ておしりが引けてしまっている。やっこのことで部屋に入り終え、ひと息ついたチエコが

「でもっこちゃん、近ごろおとなしいんよなあ、どうしたんかな。私らがきれいにしよるけん、喜んでるんかなあ。」

戸を閉めた後、つぶやいた。

「そうかなあ。」とヒトミ。

「そうよ。きつとそうよ！　なあ。」

感激屋のアユミは瞳を輝かせてみんなに力説している。

私はしゃがみこんでっこがエサをおいしそうについば

む様子を眺めながら、

「そくだよね。きつとそくだよね。」

確かめるようにつぶやいた。

〈まあるく〉

運動会でするリレーの練習をしようと誘われ、園庭に行こうと玄関を通りかかると、アキ、アキコ、ヒトミやマリエらが赤ちゃんうさぎを抱いて遊んでいた。アキやヒトミは後足をヒョイと持ち上げ、

「逆立ち逆立ち。」

と喜んでゐる。前足を持ち上げて犬の「チンチン」のよな格好をさせたり、ポーズをつけたり、まるでぬいぐるみのような扱いだ。うさぎは迷惑そうに首を振り始めている。私は「嫌だな」と思いながらその場に座り込み彼女たちの顔を覗き込んだ。

「先生、これ逆立ち。」

アキが屈託のない笑顔でうさぎにポーズをさせて見せる。私は思わず苦笑い。

マリエが抱いているうさぎを見ると、目を閉じてすやすや眠っている。

「先生、見て。赤ちゃん、寝よう。かあわいい。」

マリエはうさぎの背中を撫でながら、細い目をさらに細

めてにっこり笑った。

「ほんと。きつとマリエちゃんのだっこが優しいんよ。それで気持ちよく眠れるんよ。」

私は自然と彼女と同じくらい細い目になって微笑んだ。

すると、アキヤヒトミがハッとしたように赤ちゃんうさぎを抱き、いいいいこするよう撫でてあげ始めた。「ありやありや……」一言のあまりにもの大きな効き目に驚きながらも、さつきまでとは異なり、柔らかい手でうさぎを包み込んでいる彼女たちに向かって、「そうそう、手をこうやってな、まあくして抱いてあげるんよ。おなか持ったら苦しくなるから気をつけて……。」

と、落ち着いた声で話をした。

以前にこんなことがあった。

これまで、赤ちゃんを産んでも世話をせず、いつも死なせていた母うさぎに変化があった。保育者が赤ちゃんの口をおっぱいに近付け、嫌がるうさぎをなだめなが

ら乳を吸わせることを重ねるうちにお乳を飲ませることを学んだようだ。そこで初めて母性というものに目覚めたいらしい。せっかく神様から残された命と、母ウサギに与えられた育児のチャンス。母親が興奮して自分の子どもを殺してしまつてはと、しばらくはダンボール箱に入れ動物の家から離れた倉庫の中で親子が生活できるようにした。

「わっ、ちいさあい。」

朝、えさをあげる為その倉庫の戸をわずかに開く時、子どもたちは私の側で身を乗り出し初めて見るその姿に小さく声をあげる。

「そつとしておこうね。」

みんなでひとさし指を口元にあて、顔を見合せながら静かに戸を閉めた。

すべすべしたピンク色の体が、白いふわふわになり目も開いてくると、それまで我慢していた「触れてみたい」「だっこしてみたい」という願望がむくむくと起き上がってくる。

「先生、ちょっとだけ、いいかな。」

ユリやヨウコは胸の前でだっこするまねをして尋ねる。

「そうやなあ、もう骨がしつかりしてきたし……。気を付けてね。」

ユリは「わかった」と目でうなずき、両手で慎重に赤ちゃんを抱きかかえた。

「わあ、あったかあい。ヨウちゃんこれ触ってみい。」

「うわあ、ほんと。ほんで、ふわふわやなあ。」

「かawaiiい。」「ふふふ……。」

後からやってきたチエコが

「わたしも。ちょっと貸して。」

少し強引にふたりの間に入る。毎日うさぎたちの様子を見に訪れお世話していることを自負する気持ちがあるようだ。

「かawaiiい。先生これ見て。寝よるよ。」

もう一羽のうさぎを撫でながらささやいた。そして、チエコが呼びにくるまでうさぎを離さなかった。

母ウサギも安定し、赤ちゃんも葉っぱが食べられるよ

うになった頃、倉庫の中では気温も上がりすぎるといふことで夜間は保育室に置いておくことにした。私たちは戸締まりをし、何物も入る隙間がないことを確認して帰ることが日課となった。

ある朝、私たちはうさぎの赤ちゃんが二羽、いなくなっていることに気が付いた。子どもたちが登園する前の慌ただしさの中、必死で園内を捜したが見つからない。外に連れていかれたのかもしれない……。諦めの雰囲気か漂う中、遊戯室の片隅から、あの愛らしかった姿からは想像もつかないような姿で見つかった。

子どもたちに死の真実を知らせなければ……。いや、私たちは、とても子どもたちには見せられなかった。突然、かわいがっていた動物がそんな姿になって現れたらどれほどショックを受けるだろう。悲しむだろう。うさぎは私たちの間で安住の地に葬られた。

保育室に帰ると私は、もうすでにままと遊びを始めていたチエコらに早速赤ちゃんうさぎの死について知らせた。

「えっ。死んでもたん。」チエコは驚きの声をあげた。

「どうして死んでもたん。」チヒロが尋ねてくる。

「どうもな、猫か何かに食べられたみたいなんよ。半分以上残った頭と、胴体とが、……離れて血だらけで見つかったな。」

「かわいそう。」

カオリは悲痛な声をあげる。チエコは何やら考えこみながら

「ふうん、死んでもたん。」

とつぶやいた。そして

「かわいそうやなあ。」

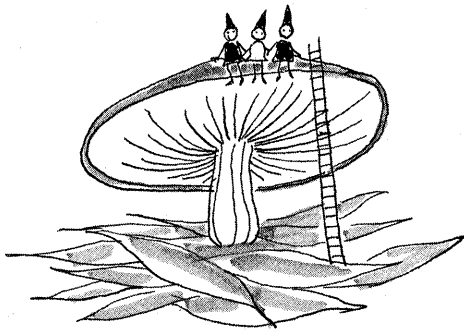
淡々とした口調で二、三言葉を発した後、

「ままごとのへやに行こう。」

彼女たちを連れて、駆けていった。

当然彼女たち（特にチエコ）は悲しみに打ちひしがれるだろう、と予測していた私は意外に思った。しかし悲しみの表現には様々なものがある。その場で涙を流して

表現する子もいれば、人前で平気そうに振る舞っても心で泣いている子もいる。それが深い悲しみであればあるほど、表面だけ見て判断することなどできないのではな  
いか。そう考え、もう少し様子を見てみることにした。



しかし、それから彼女たちの口からこのうさぎの死について語られることはなかった。生き残った赤ちゃんうさぎと触れあっている姿を見ても、まるで二羽のうさぎだけがこの世界から切り取られていったようだ。以前と何ら変わるところがなかった。その時、私の中で、「今までに何か、取り返しのつかないことをしてしまったかもしれない」という思いが次第に強くなっていった。

目前にいるアキコは、うさぎに触れている小さな手に神経を集中させ、さらに優しい手で撫で始めた。

### へどうして死んだのかな

ある日、小さなかごの中でぐったりと動かなくなっている赤ちゃんうさぎが見つけられた。えほんのへやの片隅に置かれていたかごの中には、ままごとに使う人形の布団が敷かれ、うさぎは掛け布団との間にもぐりこむようにしていたそうだ。愛玩具のように赤ちゃんうさぎをかわいがる先日の子どもたちの姿が思い出されてきて、

なんともやりきれない気持ちになる。ままごと遊びで持ち運びされたり、だっこされたりする中で圧死したらしい。ピクリとも動かないうさぎに気がついてから、恐らく申し訳なくなつてこっそり置いていったんだろう、と午後の保育者のミーティングで話し合った。そして、子どもたちの赤ちゃんうさぎに対するかわり方が私たちが願っているものと最近少しずつできてきているのではないかとという結論に達した。私たちはそれぞれのクラスで赤ちゃんうさぎとともに生活することによって子どもたちに経験してほしいと願っていることと照らしながら、この死について知らせることにした。

次の日、降園の準備を終えたクラスの子どもたちを前に、私はゆっくりと話し始めた。

「実は昨日、みんなが帰る頃、小さなかごの中で赤ちゃんうさぎがぐったりしているのが見つかりました。見るとね、もう赤ちゃんは息をしていなかったの。死んでしまっていました。」

保育室がにわかに騒つき始めた。

「知つとう。えほんのへやで見つかつたんやろ。」

「私、女の子が遊んでるの見たよ。」

朝からうさぎが一羽足りないことに気付き、尋ねてきていたチエコら女兒たちが眉をひそめて口々に言う。

「うさぎはどんなになつとつたん?」「血、出とつた?」

運動会の変身ごっこで身につける衣装作りに夢中になっていた為、初めてこの事実を知らされたアキヒロたちも怪訝な顔をしている。

「血もね、鼻から出てたみたい。」

「かわいそう……。」ナホが表情を曇らせた。

「せつかく大きくなつていたのに。」

足繁く動物の家に通い、うさぎの成長を楽しみに見ていたチヒロが、仲良しのカオリと顔を見合せて言う。

カズキの瞳が真っすぐに私に向けられ、この言葉が切り出された。

「どうして死んだんだろ。」

私は、心の中で同じ言葉を何度も繰り返した。

「猫にやられたんかな」「野良犬が食べたんだろ。」

私があればこれと思いをめぐらせている間も子どもたちの話は続けられている。

「うさぎ、ぎゅっと持ちすぎたんかな。それで、息ができなくなつたんかな。」「でも血が出とつたんだろ。」

「高いところから落ちたんちがうん。ほんで血がでたんやない。」「そうかなあ。」

それぞれが自分なりに原因をつきとめようとしていた。

私は彼らの意見がしばらく途切れると、口を開いた。

「私も、うさぎさんは、ぎゅっと強く持ちすぎて死んでしまったと思うんよ。ぎゅっと持ちすぎて、息がでなかつたんよ。」

「かわいそう。」チヒロがつぶやくように言う。

「うさぎさんは口がきけないけど、きつと苦しいって言いたかつたんだと思うんよ。大人のうさぎは体がしつかりしてるけど、赤ちゃんのはまだ小さくって弱いよね。」

しばらくそつとしておいてあげようと思うんだけど、気を付けてあげようよ。」

赤ちゃんうさぎを持ち運んで遊んでいたチエコやアミが伏し目がちになった。

\*

私たち保育者は、子どもとともに生活する中で、彼らが身近な動植物と触れ合う体験を豊かにしていきたいと考えている。そのために、それらに対する興味・関心が高まったり、性質を学んだり、大切にしたりする実体験の積み重ねが重要であることは言うまでもない。

しかし、昨年の私のこの体験を振り返ってみると、保育するという営みが「よい体験を保障しなければ」という使命感のみによって行われてくると、本当に大切にしていかなければならないことが抜け落ちてくるように思う。あの時私は子どもと生活する保育者でなく、「子ども」の育ちにふさわしい体験を叶えよう」と使命感に燃えた観察者になってしまったのかも知れない。本当に子どもや動物とくらししているのであれば、「私も、うさぎさんは、ぎゅっと強く持ちすぎて死んでしまったと思

うんよ」といううさぎの死を目のあたりにした時出た言葉も、言葉だけに留まらずうさぎの死に対する悲しみを素直に表現できたのではないかと思う。

私は動物とともにくらすことの豊かさとは、「好きだからもつといっしょにいたい」と思ったり、優しい気持ちになれたりすることなのではないかと思う。そのようなくらしぶりの中では、自然に相手の命の重さについても感じ、考えていけるようになるのではないだろうか。子どもたちに動物とのそんなくらしぶりを願いながらも自分自身のくらしぶりはそうでなかったことを、子どもを鏡として、こうやって認識することができた。六月のうさぎの死に対するチエコたちの姿や、九月のうさぎの死に至るまでの、子どもたちのうさぎへのかかわり様は私の動物に対する思いの反映であったのだろう。

何かの縁でめぐり合わせるそれぞれの命。お互いに生命の息吹を与えあう存在であるために、鏡が曇ってしまわぬ様、日々の保育の営みを見据えていきたい。

(鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園)